

SONYは、戦後の日本に花開いた スタートアップ企業だった①

井深大氏と盛田昭夫氏の因縁

井深氏と盛田氏の因縁

日本を代表する世界的企業SONYの創業者である井深大氏と盛田昭夫氏は、SONYの前身である東京通信工業株式会社を立ち上げる以前からの旧知り合いでした。

栃木県の日光に生を受けた井深氏は、早稲田大学理工学部在学中に「走るネオン」と名付けられた光通信の実験を成功させ、その研究製品は卒業後



井深大氏

本誌主幹 大中吉一

にバリ万博で金賞を受賞するという偉業を成し遂げ、「天才的発明家」と言われた人物でした。

一方、盛田昭夫氏は、愛知県で江戸時代から代々続いた造り酒屋の長男で、幼少時代から電気や科学を勉強したいとの思いを抱き、大阪帝国大学理学部物理学科に進学。そこで海軍の研究機関を手伝ったことから、海軍に所属する委託学生となり、「海軍の航空技術廠」に所属するようになりました。

そこには、東京芝浦電気（のちの東芝）の入社試験で不採用となった後写真化学研究所を経て「日本測定器株式会社」を立ち上げ、軍需電子機器の開発を行っていた井深氏がいました。

2人は航空技術廠の光熱兵器部というところで「マルケ」と称された熟練探知の研究に携わることになります。

当時井深氏は35〜36歳、一方の盛田氏は23〜24歳と13歳違いの2人でしたが、研究者同士意気投合することになります。

こうして生まれた井深氏と盛田氏の因縁でしたが、敗戦の混乱期にお互いが消息不明となり、音信不通となっていました。

戦中には海軍中尉として内務士官を務めていた盛田氏は、戦後になると大学時代の恩師の導きで東京工業大学の専門部で物理学を教える身となりましたが、戦中に職業軍人だった者は就職に適さないという理由からその職を追われ、盛田家の本拠である愛知県知多半島の小鈴谷に引きこもることになってしまいました。

そんな折、たまたま目にしたのが、朝日新聞の「青鉛筆」でした。そこには井深氏が「東京通信研究所」を始めるといふ記事が出ており、何かを作りたい、物理学で身を立てたいと願っていた盛田氏は、すぐに井深氏に連絡を取りました。

昭和21年に、その「東京通信研究所」

が「東京通信工業」となるのを契機に、本家の造り酒屋の跡取りを返上し、井深氏の会社設立に専念する決心をしたのです。

聞くところによれば、井深氏は何回も小鈴谷に向き、盛田氏の入社を嘆願したそうです。

結果的に盛田昭夫氏の弟が家督を継ぐこととなり、ここに井深氏と盛田氏によるスタートアップ企業である「東京通信工業社」が誕生することになりました。

戦後の荒廃から立ち上がる

早稲田大学理工学部出身の、今で言えばかなりオタクな技術者だった井深氏には、そもそも優れた経営手腕があったわけでもなく、長男を送り出した盛田家としては、その老舗造り酒屋の大番頭を送り込み、しっかりと経営面でのサポートをしたそうです。何よりも、一時期は「東京通信工業株式会社」の筆頭株主が盛田家の酒造会社だったとさえ伝え聞いております。

さて、1945年9月に井深氏がスタートした新会社は、当初は日本橋の白木屋3階の電話交換台があった狭い部屋で産声を上げました。コンクリー



盛田昭夫氏

この大成功を前出の朝日新聞「青鉛筆」が取りあげ、井深氏と盛田氏を再び結びつけたのです。

会社設立に際して井深氏が語った言葉が残っています。

「大きな会社と同じことをやったのでは、我々はかなわない。しかし、技術の隙間はいくらでもある。我々は大会社ではできないことをやり、技術の力でもって祖国復興に役立てよう」

お金や機械はなくても、頭脳と技術があれば何でもできる。人真似や他社の追従では道は拓けない。これが東京通信工業の方針だったのです。

こうして立ち上げた「東京通信工業株式会社」ですが、当初は何をするという方針すら明確ではなく、ただやる気だけが先行する形だったそうです。

そうした状況下ですが、井深氏はさまざまな発明に没頭し、それを資金面で支える役割を盛田氏が担ったと聞いています。

言い換えれば、井深氏が生み出したさまざまなアイデアや発案があり、それを開発プロジェクトとして陣頭指揮し、製品化していくのが盛田氏というような構図があったと思います。

そんな折、怪しげなものも含めて、さまざまな商品を開発しながら前進する「東京通信工業」に、NHKから依頼が舞い込みました。旧軍用無線機を放送用の無線中継受信機に改造するというプロジェクトです。実は戦後の日本中の通信施設は壊滅状態となっており、NHKの放送施設も例外とはいかず、かなりの打撃を受けていました。スタジオの修理回復とともに、全国放送のための無線中継の受信所を日本各地につくることが急務だったのです。

戦後すぐの日本には壊滅的に資材がありませんでした。ところが、山梨県韮崎の山中にあった大きな防空壕には陸軍の通信機材が大量に保管されたままになっていて、そこに「地二号」という短波・中波のプラグインコイルの付いた対空無線の受信機が大量にあったのです。

NHKはこの「地二号」の修理と改造を「東京通信工業」に依頼したのである。

この事業の遂行には、「東京通信工業」の品川御殿山への移転を世義なくされた事態など、さまざまな問題も発生しましたが、この事業の遂行と移転によって「東京通信工業」は大きく前進することができたのです。

いよいよメーカーとして起つ

こうして、敗戦後の混乱期に産声を上げた「東京通信工業」の井深氏・盛田氏という2人の因縁ともいえる関係が大きな前進を遂げたのです。

その後、お2人はまず、日本初のテープレコーダーの開発に着手します。

録音テープの素材における開発など、艱難辛苦を切り拓き、資金難を乗り越え、さらに録音テープの表面に塗布する酸化第二鉄の微粉末づくりまで試行錯誤を繰り返し、さらに駆動するモーターの開発までを手掛け、結果的に据え置き型で業務用の「G型」というテープレコーダーを完成させます。

名付けられた「テープレコーダー (Tape recorder)」は「東京通信工業」の登録商標となり、いよいよスタートアップから本格的な電器メーカーへの歩みをスタートさせることになるのです。

トランジスタラジオやウォークマン、家庭用VTRや液晶テレビなど、Made In Japanを世界に拡げていくSONYの躍進は、次号でお話ししたいと思います。

戦時中に壊れてしまったり、敵国の放送を聴くことができないように短波を受信できなくなったりしたラジオが、戦後の日本にはたくさんあったのです。このラジオを修理し、短波放送を聞けるようにコンバーター（周波数変換器）を開発することは、戦後の世界状況やニュースに飢えていた日本人にとって大きな需要を喚起したので